

34-35  
36-37

感想

三河 澤部



日本作家の感想で、最も感通しあふ部分  
 は喚起であらうと思ふ。  
 都會一面に魚臭い日本で、そこに棲んでる  
 人間が、かか臭いことはきりつてゐる。し  
 かし、作家自身のすむ魚臭いから、  
 臭い者身知事だ、どうしよう、  
 實觀的おしうの見受けやあひ。  
 活り口、濃密な方面の喚起——茶室とか  
 肉麦とか、火葬場とか、をうろつて悪くど  
 い臭いがさう。お掛りしてゐる。唯一つ法  
 術さうしてゐるは、女性と男性との體臭——  
 一さうもせりたりかみ八分とやうとこ  
 にお掛りしてゐるわけであらう。  
 多く單元的小コンクリートの教養をま  
 りとる。日本の作家の眼は、権威をコンクリ  
 ートにかけ、積り重なりあふ、並列のあつ、  
 一組のあつ、近代的な建築の群のあつ、  
 一組のあつ、近代的な建築の群のあつ、

(三河) 澤部 一 澤部 澤部 澤部

アニマルは本能のあつた。日本の作家的、ゴ  
 ールの小説と其を比較して、いふほどの收斂  
 があるのか？ 一、その証明、海は作家  
 として、その海の中の前下 彼の書か！ ち  
 ゃと、歴史的な物体の自然、その可く機械、  
 動力、をいふやうに評す、日本、作家の威  
 望は、全く未だのあり概念的な批評！  
 ニヤク、旧いといふべきに、たゞ、文学者  
 に人間の宗教のやうにあらうと想像するは  
 。 左記階級の命下、その一、その方向は  
 正確な、著書性も著書性と評述を、その中、  
 して、ことと、知、こゝろと、著書の随處にあり！  
 作家の、自分とけ、著書、その道、そして、  
 日時、その自分の著書生活、その中、その  
 下記の著書の苦痛を、その中、その苦痛を、  
 其時、その苦痛を、著書から、その苦痛を、  
 上を著書して、その苦痛を、その苦痛を、  
 著書の苦痛。

